

天保六道銭

村上元三

徳間書店

村上元三選集／ 2

天 保 六 道 銭

徳間書店刊

天保六道銭

三〇〇円

著者 村上元三

発行日 昭和四十一年二月十五日

発行者 徳間康快

印刷所 図書印刷株式会社

製本所 高木紙工

発行所 徳間書店

東京都港区新橋四ノ十ノ一
電話代表 四三四・六一九一

乱丁・落丁はおとりかえいたします。
(検印廃止)

村上元三選集／ 2

天 保 六 道 銭

徳間書店刊

平戸の海賊

西へ行く船

ぎらぎらと陽の光が海を覆い、波止岬のあたりもその光の中に霞んで見える。さっき一雨降らせていった黒い雲が、もう北のほう遙かな竜岐の島のあたりへ去っている。

ひどく暑い。

追風を一ぱい帆にはらんで、この船は、西へ舳先を向けている。陽をささぎるものといつては何もない船上に、下帯一つの男が二十人ほど働いていた。

五百石積ぐらいいはあろうか、あまり新しい船ではないが、嵐に何べんも出会って、それをくぐり抜けてきた経験を持っているだけに、小面憎いほど落着いている。これらの海を航海するのは、池の中を進むようなもののだ、と言いたげな面構えで船は風に身を任せ、半ぶん居睡り

でもしているような余裕を保って、目的地へ向っている。べつに急ぐ船旅ではない。船の上には、大坂からこの九州まで運んできた荷が、大きな菰包みにして二十個ほど積み重ねてある。船尾には、四角い田の字を白く彫り、その中に森という字を黒く彫り抜いてある。それも、ずいぶん海風にさらされ、古くなっている。見たところは何んの変哲もない、ただの和船であった。甲高い声を立てて、海鳥が、帆布を掠めた。さっきから船槽の上に立ったまま、ぼんやり海を見ている男がいる。四十には幾つか間があるだろう。小肥りで、背は高い。骨組はがっしりしているのだが、それほど武張った感じが無いのは、この男の身のこなしが柔かいからに違いない。顔も肉づきが豊かで、眼に張りがある。白い縞の着物を着流しにしているのが、この船とは不釣り合いのように見えるが、すっかり船の生活に馴染んで、この船を自分の生活の一部にしていると思われような落着きがあった。

「重五」船の行手のほうを眺めていたその男は、低いがよく透る声をかけた。

「へえい」帆柱の下に立っていた下帯一つの男が、すぐ

に船櫓へ駆け上ってきた。これは身の丈け六尺に近いだ
ろう、仁王像みたいな身体つきで、もう鬚の毛に白いも
のが見える。身体つきと違つて、顔は柔和だが、眼つき
は凄いい。すさまじい経験を重ねてきた男だと、その眼を
見ただけでわかる。

「なんです、旦那」

「小舟が見えるんだがねえ」旦那と呼ばれた男は、ゆっ
くり手をあげてやや左舷に近い方角を指した。穏やかそ
うには見えるが、海のうねりは大きい。ちょうど船は、
西からやや南へ舳先を向けたところで、波が音を立てて
左の舷腹に打ち当る。左のほうに、肥前の東松浦半島が
延びている。それも暑い夏の陽盛りの下で、ぎらぎらと
光って、はっきりした山の形を見せていない。

「旦那、どこあたりです」

「ここから十町はあろうかな。小さい舟だよ、重五郎」

「そうですか」重五郎は、小手をかざして瞳を凝らせた。
しばらくそうやっていたが、やがて重五郎は笑った。

「丸太ですよ、旦那」

「わたしには小舟に見えるのだからね」

「わしの眼は確かです。旦那の前で威張るのもおかしな
もんだが」

「寧波のときは、わたしが勝ったよ」

「ああ、唐人の小舟に何人乗ってたか、賭をした時です
か。あれはいけねえ。前の晩、わたしは女遊びがすぎて、
くたびれてましたからねえ」

「それで思い出した」小舟が見える、といったことは忘
れたように、旦那と呼ばれた男は、船櫓の手すりに両手
をつき、重五郎へ眼顔で合図をした。風に乗った話声が
船上まで聞えぬ要心、とすぐに判ったのだろう、重五郎
のほうから裸の身体を寄せてきた。

「わたしはね、お組をこんどは大坂へ連れて行こうと思
う」

「へえ、天満のほうは大丈夫でございますか」

「女が二人ぶつかったところで、めったに焼餅なんか焼
かせやしないよ。お組だけじゃあない、平戸の店も、こ
らで閉めなくてはなるまい」

「やはり、そうですか」

「島津様でも、大隅屋をお払い箱にした。ご公儀が嗅ぎ

つけたらしい。さんざ抜荷買^{ひかひ}をやらせ、海賊同様の働きをさせておきながら、お家に迷惑がかかると、あつさり縁を切る。切られたほうは、へたをすれば暗討を食うからねえ。お大名對手だけに大隅屋も気の毒だ。だが、この森田屋清蔵は、そうは行かないよ。もしもの時は、肥前松浦六万石を、連尺^{れんじく}に背負^{かか}って立つてやるさ」言葉つきはおだやかだが、この森田屋清蔵という「旦那」の眼の中には、こわいということを知らぬ自信が、はつきり出ている。

「それでは」重五郎も、べつに驚いた様子も見せず、「平戸生れの奴らは、港に入ったあと、船から下します。人数は半分になっても、この船を動かすに不自由はありません」

「その用心だけはしておいてくれ。店の品物も、運べるだけそつと船に積んで貰おうか。日本では手に入らない品物だけは、残しておくのは惜しいからな」

「承知いたしました」なんでもない事のように、あつさり重五郎は答え、掌^{てのひら}で顔の汗を拭いながら船槽を下りかけたが、気になるのか、さつき森田屋清蔵の指さし

た左舷のほうへ、もう一ど眼をやった。

「はてな」重五郎は、じつと眼を据えた。

「旦那のおっしゃる通りです。舟ですよ、あれは」

「そうだろう、十両も賭けるところだったな」

「賭けとなると、旦那の取り立ては手きびしいからね。賭けていたら、平戸で女の匂いも嗅げねえところでした」

「漁師^{りやうし}の舟かえ」

「少しおかしゅうございますね」

「漕いではないだろうだ。人がひとり、舟の中に坐っているね。じつと動かないが」

「生きてはいるようです。妙だな」

「船をよせてごらん」

「へい」重五郎は舵取^{かじとり}りのほうへ走っていった。

「暑い」腰から扇子を抜きとり、森田屋清蔵は、それで陽ざしをよけながら、じつとその小舟のほうを見た。きぎい、と軋^きむ音を立てて、船は、舳先を変え、波をうけてよろめきながら、面倒くさそうに、その小舟のほうへ進んでいった。うねりの大きい波に乗って、漂っている小舟が見えてきたのは、それから間もなくであった。

「おおい」船子が声をかけたが、答えはない。帷子かたびらであらう、白っぽい着物を着た男が、小舟の中に身動きもせずさかすまに坐っている。漕いでいる者の姿がない。その男は、

月代さかすまを延ばした浪人風の侍だとわかったのは、森田屋の船がだいぶ近づいてからであつた。ほかに一人、白い着物を着た人間が、舟の中に横たわっているのが見えてきた。これも髪の毛を乱し、やはり身動きもしない。さすがに度胸のいい男たちも、ぞっとして顔を見合せた。強い夏の陽が、じりじり照りつける真下だけに幻にしては鮮やかすぎる。一体どういふわけで、その小舟が海上を漂っているのか、まるで見当もつかなかった。

「どうします旦那」重五郎が、また船櫓へ駆け上つてきた。

「小舟をおろして、お前、行つて見ろ。横になつてるほうは女だ。死んでいるらしいね」

「そうですか」あわてて重五郎は、船上へ走り下りた。

舷ふなばたから小舟がおろされ、重五郎をはじめ三人の船子が乗つて、その小舟のほうへ漕いでいった。親船のほうは巧みに風を利用して、そのまわりを大きく迂回している。

死びと、心中

「おおい」重五郎は、声をかけた。だが、小舟の中に坐っている浪人は、ちらりと眼を動かしたきり、返辞へしもしない。まだ三十前であらう、蒼白い細面の男で、眼の前に横たわる白い顔を見つめている。横になつてゐるその女を見たとき、重五郎たちも、強い陽ざしの中で冷たい水を浴びたような心地がした。経帷子きんかたびらを身につけ、首から六道銭ろくどうせんをかけた死人であつた。

「ほ、仏様だ」船子のひとり、艀かたまりを押す手をとめ、ごくりと唾をのんで呟いた。

「お武家さん」二間ぐらい近づいたところで、重五郎は、向うの小舟へ声をかけた。

「どうなすつたんでございます」はじめて浪人は、まっすぐこちらを見た。

「かまうな。捨てて置け」力がよわっているらしい。陰気な声でいったきり浪人は、また死人の女の顔に眼を落した。死人と一緒に死ぬ気だな、と重五郎は察した。

「つまらねえ考えは、およしなさい。ご相談に乗らねえものでもありません」

「かまうな。行け」こちらの親切を無視した相手の態度に、重五郎は、むかつとした。

「そういわれても、ほうっておくわけには行かねえ、というのは海の上のことだからね。このままでは死ぬと決った者を、捨てて行くのは、おれたちの恥だ」しかし、重五郎の意地も、相手の浪人には通じないらしい。大刀を膝のところに引きつけたぎり、まだ死人の顔から眼を放さずにいる。その女も死んでからだいぶ時が経っていると判るのは、重五郎たちの鼻に、いやな死臭が漂ってくるからであった。墓場から死人を掘り出してきたのではないか、と思われるのは、経帷子に泥がついているからで、あと一時間もすれば、死人の身体は崩れてくるに違いない。気味の悪いのを忘れて、重五郎は、舟を近づけながら、また声をかけた。

「お前さんには、死神が憑いているんだ。死んだ人に未練を残しても仕方がねえ。さあ、こっちへ移んなせえ」
「お前たちには判らぬ」顔も向けずに浪人は、低く答えて、

て、

「おれは、この女と一緒に死ぬ。黙って見逃せ」

「面倒くせえ。引きずり込め」欄干を起して、重五郎は、声をかけた。舷をよせ、船子の二人が、向うの小舟に飛び移ろうとすると、浪人は、大刀の柄に手をかけて、

「近よると斬るぞ」きらっと眼を光らせて叫んだ。だが、その浪人が、のまず食わずで、身体が弱り切っている、と重五郎には判る。

「それっ」重五郎の合図と一緒に、裸の船子がひとり、舷を蹴って向うの小舟へ飛び移ろうとした。

「斬るぞ」片膝を立てた浪人が、抜き打ちをかけようとするのへ、重五郎は裸の身体を軽々と跳躍させ、横合いから飛びかかった。舟の上で、重心がとれぬところへ、身体も弱っている浪人は、重五郎の剛力に突きとばされて、

「何をするっ」喚き声を残し、刀を二寸ほど抜きかけたまま、重五郎と一緒に、小舟から海中へ落ちていった。ぐらりと大きく揺れた小舟の上で、経帷子の女の死体が、まるで生きているように動いた。

「なむあみだぶ」思わず死人に向つて両手を合せてから、船子たちは、海中をのぞいた。一たん沈んだ重五郎は、やがて浪人の身体を抱えて、波のあいだに浮き上つてきた。刀を抜きかけたのが、浪人のせい一ぱいの力であつたに違いない。海の中へ落ち、水をのむと、氣を失つてしまつていた。

「さあ、このまま引返せ」まるで魚同様に、海の中を自由に動き廻る重五郎だけに、息も切らず船子たちに指図した。

「仏様は放して行け」自分たちの小舟の舵へ手をかけ、浪人の身体を押し上げた。船子たちは、しきりに念仏を唱えながら、死人を乗せた小舟を押し放し、重五郎を引っぱり上げると、逃げるように艀を押し出した。親船に、その浪人を担ぎ上げたところ、死人を乗せた小舟は、あとを追うように漂いながら、しばらく波のあいだに見えていた。裸してみると、浪人は、見かけよりもいい身体をしている。左の二の腕と、右の高股に、刀傷のあとがある。胃の腑は、空っぽらしい。

「まだ死人の匂いがついてやがる」船子たちは、自分の

身体を嗅いでみて、眉をしかめた。重五郎に介抱されて浪人は、ようやく息を吹き返した。うつろに眼を開き、真上から照りつける夏の陽にまぶしそうに顔をしかめていたが、意識がはつきりするにつれ、今までのことを次第に思い出してきたらしい。

「おきよう、おきようは何うした」謔言のようにいつて、浪人は、立ち上ろうとしたが、よろりと船板の上に倒れ、重五郎に抱き起された。

「死人と一緒だっただけに、お経を氣にしているらしい」船子たちは囁き合ったがそれはお経ではなく、おきようというのが死んだ女の方であつた。

「おれ一人助かろうとは思わぬ。おきようを何れへやつた」半狂乱のようになつて、よろめきながら海へ飛び込もうとするのを、重五郎が抱きとめた。

「お武家様」船櫓からおりてきた森田屋清藏が、声をかけた。

「ともかく何か召上つて、元氣をつけて下さい。お話を伺つてから、どうにも死にたいとおっしゃるなら、お引きとめは致しません」なだめるようにいわれて、浪人は、

がくつと氣落ちがした様子だった。顔を伏せて、重五郎の腕の中で、おとなしくなっていました。胴の間におりた森田屋清蔵のところへ、やがて重五郎に連れられて浪人がやってきた。食物と水をあてがわれ、元氣を取り戻した浪人は、重五郎から貸してもらったのだらう、洗ひざらした単衣ひとえを着て大刀を右手にさげていた。

「さあ、お坐りなさい」扇形に切った窓から、波風が吹き込み、船の上にいるより、ここのほうが涼しい。

「わたくしは、森田屋清蔵と申します」先に清蔵は挨拶をして、「肥前の平戸、大坂、それから江戸に店を持っております海産物問屋でございます。これからこの船は平戸へ向いますが、このまま乗っておいでになるとも、氣に入らなければ海へ飛び込むとも、あなた様のご自由でございます」にやりと人を食った笑ひ方をした。浪人は、むすっと無表情な顔で、

「わしは金子市之丞と申す者だ。生れ故郷や素姓など一切訊かぬでほしい」

「よろしゅうございます。伺いますまい」ゆつたりと対手を見ながら、清蔵は、「どうやら、あなたから死神が

放れた様子でございますな」

「死のうと思えば、いつでも死ねる」

「ご尤もでございます。あの舟に乗っておいでのお方は、墓場はかばの中から掘り出して来られたようでございますね」ずけずけと訊かれて、はじめて金子市之丞という浪人の顔に、悲し気な色が流れた。

「そうだ。あれは、わがいのち同様であつた女。舟に乗せて、わしも諸共に海の底に果てる積りであつた」

「なるほど、死びとと心中をなさるお積りでございましたか」言葉つきは柔かいが、對手に少しも同情を寄せていず、むしろからかっているような清蔵の表情であつた。

ぎやまんどろろう 燈籠

金子市之丞というのも、偽名かも知れない。言葉にも西国の訛りはなかった。背中に、影のようなものを背負っている。いつでもいのちを捨てられる覚悟、というよりも、捨鉢すてばちになっているところがあつた。世の中を白い眼で見て、人は人、おれはおれ、と割切っているような

ところもあるが、それは森田屋清蔵の眼からは、青くさく見える。

「おきようさん、とおっしゃるそうですね。さっきの小舟に乗っていた仏様は」わざと意地悪く清蔵が訊くと、市之丞は、薄い唇をゆがめて、

「そうだ。おれを捨て、親のすすめる縁談に従おうとして、急に死んだ」

「自害をなさったので」

「首をくくった。でなければ、おれが殺していたろう」平気でそういつてのけたのが、へんに気負っているように見える。相手に馬鹿にされまい、おれは、こんな男なのだぞ、と胸を張って凄んで見せているように思える。そばにいた重五郎が、あの女は首くくりと知って、いやな顔をした。「墓場から掘り出して、おれは小舟に乗せた。沖合までは艀を押したが、あとは艀を捨て、潮の流れに舟を任せた」ぼそぼそした声で呟いたかと思うと、急に市之丞は、肩を震わせ、両手で顔を覆って、すすり泣きをはじめた。重五郎が、黙って清蔵の顔を見ると、自分の頭を人さし指で叩いた。暑い夏の陽にさらされた

ので、少し変になっているのだ、という意味らしい。「ともかく、ぐっすりお休みなさい」何処から女の死骸を運び出した、とも訊かず、清蔵は、子供をあやすようにいった。

「明日の朝、この船は、平戸に入ります。気が向いたら、平戸においでなさい。お世話申しませう。今夜のうちに、あなたの姿が船から消えていても、探すような事は致しません。お心のままになさいませう」こくりとおとなしくなずいて金子市之丞は、そのまま重五郎に連れられ、胴の間を出ていった。夜になって重五郎が、にやにや笑いながら、胴の間に入ってきた。

「あの浪人、よく寝ています。死神も愛想をつかして逃げ出したようです」

「本当かな、死人を掘り出してきたというのは」

「嘘じゃあねえと思えます」

「何処からだろう」

「さようですね。昼間の潮の流れ具合から見るとあの浪人、今福か志佐の浜あたりから舟を出したんじゃないかと思えます」

「兇状持だね」

「わたしも、そう思います」

「平戸へ連れて行ってやれ。剣術は出来そうだ。役に立つかも知れない。お休み」森田屋清蔵は、薄べりの上へ、そのままごろりと横になった。絹布の厚い布団に臥ても、こういう臥方をしても、なんでも板についているのが、この男の特徴であった。

あくる朝早く、船は、平戸の瀬戸へゆっくりと入っていった。ここは、雷の瀬戸ともいう。瀬の流れが早く、はばも狭いので、よほど慣れている者でないと、船を操ってこの瀬戸へ入るのが難しい。だが、森田屋の船は、船頭の重五郎が、自分の身体を動かすように、自由自在に扱った。

小ぢんまりした形のいい丘陵が、夜明けの色の中を、右舷に近づいてくる。岸边は、ゆるやかに見えながら、ずいぶん細かく入り組み、暗礁が多いので、うかつに船は寄せられない。黒子島というのが、前面に見えてくる。それを目印に舳先を転じ、入江に従って入って行くと、三方を丘陵に囲まれた町がある。それが、遠く天文年間

から寛永十八年、居留地の外国人が長崎に移されるまで、およそ百年間、外国貿易の中心地となっていた平戸の港町であった。天文十九年、支那人五峰王直が、はじめてこの地に至り、邸宅を構えて足溜りを作ってから、ポルトガル人を連れてきて東洋貿易をはじめようになったという。森田屋清蔵の船は、入江に入ると、船番所の前で帆をおろし、錨を沈めた。やがて船番所から、役人たちが小舟で乗りつけてきたが、べつに荷を調べるでもなく、胴の間へも入らずに、そのまま引きあげていった。胴の間に、あの金子市之丞という浪人を隠してあるが見つかっても言い開きをする用意は、森田屋清蔵のほうに出来ていた。

「いつもの通りのお調べでございます。べつに変わったこともないようですが」重五郎がいうと、清蔵は、にやりと笑って、

「下役人の知ったことではないさ。陸へ上ったら直ぐ、お城へ行つて見よう。お国家老から、きつと因果を含められるだろう」と、平気な顔でいた。最初の小舟で、まづ清蔵が上陸をした。舟着場に、店の者が十人ほど出迎

えていたが、番頭の喜助が心配そうに進み出ると、

「ご家老様から、お呼出しが参っておりますが」

「わかつてゐる。店へ行つて支度をしよう」行きかけてから清蔵は、喜助にささやいた。「浪人さんの客がひとりゐる。表へ出さないよう、店で世話をしておあげ」

亀岡山にある松浦^{まつら}沓岐^{くさき}守^{まも}の城は、城下のどこからでも眼の上に見える。いま城主は、江戸に参観に行つていて、城を預つてゐるのは、城代家老の松浦藏人であつた。城下の崎方^{さきかた}町に、森田屋の支店がある。この平戸は、国姓爺^{やていせい}鄭成功^{ていせい}の誕生の地でもあり、古くから明国との貿易も行われ、外国人居留地には、むかしはオランダ人、ポルトガル人、イギリス人などが住んでゐた。崎方町にも寛永十八年までは、外国商館の建物や倉庫がならび、オランダ人の造つた塀が残つてゐる。寛永十八年に、ここ外国人が長崎の出島に移されたとき、外国商館のほとんどは取り壊されたが、森田屋の店は、廃屋^{はいぐら}になつてゐた。その一軒を買い入れ、手を加えたものであつた。外構^{ぐわいこう}えは、日本の商家とほとんど変りはないが、奥へ入ると初めての間は、まるで龍宮城へ来たような心地になつて

しまふ。金子市之丞も、そうであつた。店の土間には、海産物の荷が積んであるきりで、小売はしてゐない。帳場があり、土間から奥に続いているが、あるじの清蔵の居間を中心にして、長崎以外では見られない飾りつけがしてあつた。唐風と洋風のまじつた造りで、畳の上には絨毯^{じゅうたん}を敷きつめ、唐風の卓子に椅子、オランダ風の棚、イスパニア製の壁掛がかかつてゐる。天井からは、ぎやまんの燈籠^{とうろう}が吊してあり、燈が入ると琥珀色^{こはくいろ}に光る。大事な客を通すのはこの部屋で、その奥に清蔵の居間があり、隣にお組の部屋があつた。お組という女が何処の生れなのか、船頭の重五郎でさえ知らない。この平戸の店、大坂の店、それから江戸の店と、ほうぼうの店に一人ずつ、清蔵は、女を置いてゐる。しかし、店のことを任せるといふのではなく、一年のうち一度か二度、清蔵がきたときに寢床の用を勤めるだけだが、お組は、そればかりではなく利巧で、肚も出来てゐる女であつた。清蔵のえらぶ女だから、お組だけでなく、ほうぼうの土地に置いてある女も、みな口の固い、しっかり者ばかりで、ただの置物とは違つてゐた。お組は、もう二十を二つ三つ

出ているだろう、下ぶくれで肌が白く、ねっとりとした感じの美人であった。

「旦那から言いつかっております。どうか、お寛ろぎ下すって」珍しそうに家の中を見廻している市之丞を、女中たちに言いつけ、風呂に入れてくれた。奉公人も、奥に女中が五人ほどいるし、それは店とは切り離してあるので、ちょっとした大名屋敷のような仕掛けであった。

店の者も二十人を越えるが、勝手に奥へ入ることは許されず、番頭の喜助が一々取り次いだ。風呂場は和風の檜造りだが、市之丞が風呂から上ると、仕立ておろしの単衣から新しい下帯まで用意してあった。女中が髪の手入れをしてから、案内されたのは、庭へ向った茶室風の部屋であった。昼飯のあとも、市之丞は、ひとりきりでその部屋に置かれた。あるじの森田屋清蔵が、城から店へ帰ってきたのは、午をだいぶまわったころだった。「お帰んなさいませ」出迎えた番頭の喜助や店の者へうなずいて、紋服に袴をつけた清蔵は、奥へ入っていった。お組が、芭蕉布の単衣に着換えさせてくれるあいだ、清蔵は黙っていたが、

「あの浪人、どうしている」

「おとなしくしていますよ」

「刀を見たかえ」

「人を斬ったことがあるそうですね。それも一度や二度ではない」

「腕の立つ男ならいいが。世の中がいやになっているあいう男は、使いようでは大そう働くものだ」

「お城の首尾は、いかがでした」

「うむ」扇子を使いながら、清蔵は庭を見ていたが、「上方へ連れて行ってやろうか」

「遊びにですか」いきなり嬉しそうな顔はせずに、お組は、するりと身をおかわすように訊き返した。清蔵は、まるで人のことでも話しているような顔つきで、

「お前の気持次第さ」

「天満の人と会うのは、いやですよ」

「向うでも、そういうだろう」

「身の廻りのものだけ、まとめておきます」お組も、あつさりと答えた。くどく訊き返されるのを清蔵は嫌うし、お組も清蔵がお城へ何んな用で呼ばれたのか判っていない

がら、仕事のことは口に出して訊こうともしない。夕飯のとき、金子市之丞は、さっきの洋風と唐風のまざり合った飾りつけの部屋へ案内された。ぎやまんの鉢や皿に、めずらしい料理が盛られ、運ばれてきた。

「洗い髪で御免下さい」湯上りと見え、お組は髪をうしろへ垂れ、さっぱりとした単衣で給仕に出た。

「これは長崎料理ですよ。魚、鶏、それに豚の肉も入っているが、おいやなら箸をつけなくても結構ですよ」清蔵にいわれて、市之丞は、

「いや食べてみよう」意地を張ってそう言い、箸をのばしたが、豚の肉を口に入れたとき妙な顔をした。ひねくれ者で強情だが、こういう浪人は清蔵には扱いやすい對手であった。

「ご存知ですかね」これも長崎から運んできたという、舌ざわりのいい、葡萄から醸った酒をのみながら、清蔵は市之丞に話しかけた。「この平戸は、奈良朝のころから、海賊の棲家だったところでね、バハン船も、ここに船がかりをしたようだし、大島伯耆守という海賊將軍も、ここに頑張っていたそうですよ。もっとも、むかしの海

賊というのは盗賊じゃあない。水軍という意味なんだが、この平戸からずいぶん外国へ向って船が出ていたようです」

「森田屋さん」清蔵に頭を押えつけられまい、という氣らしく、市之丞は、わざと皮肉に笑って、「というと、あんたも、つまりは海賊だね」

「いやあ、わたしは、ただの商人さ」

「商人が、なぜ船の中に鉄砲を隠しているね。胴の間の麻糸の下に、鉄砲がずらりと寝かせてあった。あれだけでも、あんたは首が飛ぶわけだ」

「ご覧なすったか」清蔵は、べつにあわてもせずに、「商人といっても、わたしの商売相手はなにも日本人に限ったことはない。唐人でもオランダ人でも儲けにさえなれば商いをする。お上から見れば、国禁を破っていることになるがね」

「そんなことを、わたしに話して何うする」眼を据えて市之丞は、卓子の下で、脇差の柄をそと握んだ。

「よしなすったほうがよい」と清蔵は、唇の端で笑った。「死びとと心中するところまで行っただんだ。どうだね、